

東京大学 東洋文化研究所

News Letter

2024 春号



特集インタビュー

中島隆博 東洋文化研究所 所長



●中国哲学研究者として～新しい啓蒙～

—なぜ中国哲学を専門とされたのでしょうか。

中国哲学という学問は、私の駆け出しの時には大変マイナーな学問でした。マイナーな哲学から普遍的な問いを仕掛けていく。これがとても大事なのではないかと思っていたわけです。もちろん今では、中国という国自体が経済的にも非常に強い国になり、当時のようなマイナー性は失われつつあるのかなという気もしますが、それでも、近代のヨーロッパを中心とする哲学がまだ軸になっているとすれば、マイナー性は消えていないと思っています。そこから普遍に向かって問い直すことによって、ヨーロッパ中心主義の哲学観を変えることができるのではないかと。今でもそのような思いを持ち続けています。



出典：中島隆博『荘子の哲学』講談社学術文庫、2022年

—どのような研究に取り組んでこられましたか。

もともと私は卒論にあたる研究で、老子の出土文献である馬王堆帛書をもとに『老子』を読み直しました。その際に、日本で語られていた老子像がガラガラと崩れるという経験をしたわけです。その後、大学では荀子を主に研究するようになりました。『荀子』を読んでいくわけではなかったのが「性」をどう訳すかです。荀子は「性を変化させる」と書くわけですが、これはどういうことなのか、人間の性はそんなに簡単に変わるものかと思ったわけです。この発想はもともとどこから出てきたのかというと、荘子なのだろうと考えました。日本だけではありませんが、荘子の思想の特徴は「斉同の思想」、高みから見ると何でもかんでも同じなのだと言われます。しかし、荀子に与えた影響から見ると、荘子の中での「物化」、他のものに変化していく、この変容の問題こそがすごく重要なのではないかという気がしました。

戦後のフランスでは、ドゥルーズがこの変容の問題に注目し、レヴィナスは「他者」を強調しました。そういうものを横目で見ながら、中国哲学の脱構築を行なったのです。ある時期の中国哲学は、存在や所有といった西洋の概念を読み込み、その方向で理解しようとした向きもあったのですが、そんな無理をしなくてもよいと思いました。中国哲学の固有の概念に任せて、それを大きな文脈に置き直したほうがよりよいのではないかと。荘子の本を書いたときにも、「物化」すなわち他者になっていくことに注目しました。それは単にその人が変わるだけではなく、その人が構成している世界のあり方自体が変化していくという主張だと思ったわけです。

—現在取り組まれている研究についても教えていただけますか。

友人たちと一緒に、2018年に世界哲学を始めました。その成果を纏めた『世界哲学史』全9巻（ちくま書房・2020年刊行）はわれわれが思っていた以上に多くの読者を得ることができました。中国哲学のみに焦点を当てるのではなく、世界哲学という大きな文脈をつくり、西洋中心主義を離れた上で、中国、日本など地域の哲学にある indigenous な（在来の）概念が、どのように普遍化されていくのかという研究を進めています。そのなかでたどり着いたのが、私たちには「新しい啓蒙」が必要なのではないか、という問いです。

17、18世紀のヨーロッパの啓蒙の時代は、人間、特に理性のある人間を世界の中心に据え、強力な人間中心主義をつくりあげたものでした。その結果が、人間以外の動物や環境といったものに対する傲慢さであり、人間においても女性を蔑視したり、奴隷制を作ったり、彼らが搾取してもいいと考えた人々を差別的に分割したのです。これを決定的に断ち切る、「新しい啓蒙」が必要なのではないかと考えるに至り、今は研究所も巻き込んで、「新しい啓蒙」のプロジェクトをやろうとしています。

ドイツにマルクス・ガブリエルという哲学者がいますが、彼とこの点で非常に共感しました。彼はハンブルグで The New Institute を立ち上げ、そこで「新しい啓蒙」のプロジェクトをやっています。それに呼応して、ぜひ東文研、東京大学でもこれをやっていきたい。これは、哲学だけの話ではなく、学問のあり方そのものを根本的に問い直す段階にきているということだと思います。また、古い啓蒙がトップダウンであったのに対し、「新しい啓蒙」はボトムアップでなければならない。先ほどの indigenous な概念をもう一回考え直し、それと近代的な知の間に橋を架けて、新しい社会的想像を發明していくことが求められていると思います。



出典：M・ガブリエル・中島隆博『全体主義の克服』集英社新書、2020年

●東文研が目指す先～東洋文化研究所所長として～

—2023年4月に東文研所長に就任されました。

就任にあたって、自分の考える東洋文化研究所のミッションを書きました。私は、アジア研究自体が変わりつつあると思っています。今まではアメリカ発のエリア・スタディズ（地域研究）といった枠組みの中でアジア研究をやってきましたが、人類の存続を脅かす様々な危機が噴出している現代において、アジアに根差した知恵をアジアから発出して課題解決していく、そのためにはアジア研究のアジア化がどうしても必要だと思っています。アジアのそれぞれの地域の在来の概念を練り直し、鍛え直していく。その際に、どういうボキャブラリーや文脈で語るのかが問われています。

—具体的にどのような活動なのでしょう。

すでに東文研ではアジアをグローバルに考える一つのプラットフォームとして、「Global Asian Studies (GAS)」プロジェクトを立ち上げています。そこでは日本のみならず、アジア地域における地球規模の諸課題をテーマに世界中の研究者らと対話して相互理解を深めています。他にも寄付金を頂戴して運営している「東アジア藝文書院 (EAA)」もあります。その中には「潮田総合学芸知イニシアティブ」もあり、どちらも東アジアに焦点を当てています。東アジアから新しい学問を発信していくというのですが、東アジアが有している非常に豊かな概念があるわけですから、それを駆使して、新しい学問を構築しようではないかというものです。

私はこれらのプロジェクトをもっと大きく展開させたいと思っています。東文研所長として、アジアを軸に「科学技術の先端」と「人文社会科学の先端」が画期的な対話を行う場所を東文研につくりたいと思っています。これは東文研にしかできないことです。そのためにまず今年、哲学を中心に据えて、先端科学技術と人文社会科学が対話するプラットフォームを立ち上げます。これまでとは違って、この研究には社会との連携やサポートも必要だと思っています。そのために志を外に示す必要があります。



●社会が研究を支える～東洋文化研究所基金の創設～

—最近、新たに東文研の基金を作るといってお話もお聞きしました。

どの大学、どの部局もそうですが、国立大学は慢性的な財源不足に陥っています。そうすると、大学の外の力を借りるしかないのですが、最近、大学に基金という新しいシステムができました。これは、今までのように頂戴した資金をそのまま使うのではなく、頂戴した資金をプールして、その運用益で永続的に新しい研究、特に若い世代の研究を支えるというものです。

そこで2024年2月に東洋文化研究所の基金をつくりました（[本 News Letter 最終頁を参照ください](#)）。実は早速ご寄付を頂いて、大変ありがたく思っています。東洋文化研究所とその活動をご覧になって関心を寄せてくださっている方々は、少なからずいらっしゃると思います。そういう方々の思いに応え、さらにはお支えいただくことで、今まで申し上げたような新しいアジア研究を展開していく。それが東文研のミッションなのではないかと思っています。私が所長でいるうちに十分な資金が集まるかどうかわかりませんが、10年、20年とこれから先を見据えて活動したいと思っています。それによって学問の臨機応変性と長期的安定性の両方を担保したいと思っています。

●今、なぜ人文社会科学が重視されているか～人文社会科学の未来～

—それでは最後に。人文社会科学の今後についてお聞かせください。

つくづく思いますが、人文社会科学という学問が何の役に立つのだろうと考えると、広い意味での「読解」だと思います。われわれはテキストを読むという読解のトレーニングを受けます。しかし、それは単に本を読むことに閉じたものではありません。今求められているのは、社会の状況、世界の状況、そして未来をどのように読解するのかという広い意味での読解です。読解は、簡単なようで簡単ではありません。単に情報を得るような受け身の読解というものが一方にあります。他方に能動的な読解があります。自分がテキストなり、コンテキストなりに関与していくことがなければ、テキスト、コンテキストがその意味を開いてくれないという場面が多いのです。ですから、能動的もしくは関与的な読解が、今、問われているのだろうと思います。

—自らがテキストやコンテキストに能動的に関与する、そういう意味での読解ということですね。

多様性を生きている個人なり社会と対話をするとはどういうことだろうと考えさせられます。人々を絶望させている社会もありますし、特定の考え方に凝り固まった社会もあります。日本も歴史を振り返れば他人事ではありません。そうした社会の人たちと対話することは容易ではありません。しかし、先ほど、能動的な読解、関与的な読解と申し上げましたが、ある特定の価値観に染まった人のあり方、社会のあり方にも変容のスイッチが必ずあります。それを読解を通じて見つけ、場合によってはそのスイッチと一緒に押すということかと思っています。

どの社会にも文化的なレイヤーがあります。個人もそうです。複数のレイヤーが個人の中をたくさん走っていて、それが入れ子状になったり、いろいろな複雑な構造になったりしています。その中のどこかスイッチを押すと、その構造自体が大きく変わるときがあります。今までは、こっちが重要な価値で、その上にこの社会が構成されていると思っても、それとは別のスイッチを押してみると、価値の軸が変わることがあるのです。そうすると、社会のあり方や人のあり方が変わっていきます。それはどの社会であれ、どの個人であれ、起こり得ることなのです。やはり変容のチャンスですね。また荘子が出てきますが、

能動的な読解は、テキストやコンテキストに関与し、スイッチを見つけることによって、相手のありよう、自分のありよう、どちらも変えていく相互変容です。こちらはこちらで、向こう側が頑固、頑迷で変わらないと決めつけてしまっていることがしばしばありますが、それ自体を改めないといけません。こうして、真の対話が成立する瞬間を人文社会科学は支えるのではないかという気がしております。

—変容、物化、他者との対話、そして「読解」。中島先生の著作にも通底する重要な概念がちりばめられたお話でした。まだまだお聞きしたいことはありますが、本日はどうもありがとうございました（聞き手 上田遥）。

東文研では、5つの部門（汎アジア、東アジア、南アジア、西アジア、新世代アジア）がそれぞれ研究を進めるとともに、所内外で連携したさまざまなプロジェクト（GAS、EAAなど）が動いています。最近の出来事をいくつかピックアップして紹介します。

【東文研セミナー】

ブッダのイメージができる以前、 仏教美術とはどんなものであったか——

2024年1月19日、ジョン・ガイ博士（メトロポリタン美術館 上席学芸員）が来日し、「釈迦の誕生以前——初期インド（紀元前2-4世紀）の仏像」という講演を行いました。馬場紀寿教授（東文研・南アジア部門）の司会のもと、参加者とともに、初期仏教美術に関する活発な議論が行われました。



【東文研セミナー】

日本のサムライとオスマン帝国の兵隊、 これらを比較すると何がみえるか——

2024年2月16日、ギュライ・ユルマズ先生（トルコ・アクデニズ大学）が来日し、「オスマン帝国デヴシルメ制度における少年期の比較検討」という講演を行いました。

秋葉淳教授（東文研・西アジア部門）の司会のもと、参加者からは、オスマン帝国の軍団（イエニチェリ）の徴集制度について様々な質問が提起されました。徴集された少年はまずトルコ農民のもとで労働に従事する慣行がある——とのことですが、興味深いです。



出典：Rālab Book of Costumes, World Digital Library

【オピニオン】台湾総統選をどう「読解」するか——

2024年1月13日、台湾総統選挙が行われ、与党・民進党の頼清徳氏が当選しました。中台関係はどうか、日本や世界政治経済への影響はどうか。社会的関心の大きい総統選挙となりましたが、台湾研究を専門とする松田康博教授（東文研・汎アジア部門）が全国新聞記事などを通して、また共同研究者でもある黄偉修特任研究員も日本メディアやシンクタンク、現地メディアを通じて早速鋭い読解を披露されていました。



【GAS Lecture Series】

休戦協定下の北朝鮮を生きる女性たちの レジリエンスとは——

「アジア研究のアジア化」の一つの取り組みとして東文研が主催するGlobal Asian Studiesでは各分野の専門家を交えたレクチャーシリーズを展開しています。

2024年2月8日、第6回目のGASレクチャー・シリーズが、キム・ソンギョン先生（北韓大学院大学 准教授）をお招きして行われました。

キム・ジユン助教（新世代アジア部門）の司会のもと、グローバル・モビリティとフェミニズムの視点から、北朝鮮の女性について考えました。



【東文研セミナー（EAA など共催）】

日本と中国はモンテスキュー『法の精神』 をいかに受容したか——

2024年4月18日、東文研では、東京カレッジ・EAA 潮田総合学芸知イニシアティブと共催で、アンヌ・チャン（コレージュ・ド・フランス教授）の講演を開催しました。『中国思想史』でも世界的に著名なチャン先生が今回選んだ講演テーマは「日本と中国におけるモンテスキュー『法の精神』における専制政治問題の受容」。会場には学内外から溢れるほどの参加者が集まり、盛会のうちに終了しました。



Publication

東文研の教員による最新著作を紹介します。詳しくは東文研ホームページまで。



『日本の近代思想を読みなおす 哲学1』

中島隆博・末木文美士
2023年12月 発行
東京大学出版会

——近代の日本哲学のダイナミズムを
気鋭の哲学者が活写する。



『ヴァナキュラー・アートの民俗学』

菅豊
2024年4月 発行
東京大学出版会

——本書は「野」にある小さきものた
ちの豊かな創造性や、普通の人々が
「アートする」ことの意味を問う。

東洋文化研究所基金 ご支援のお願い

現在、アジアは世界人口の6割以上を占め、世界の過半の資源を消費しているといわれています。人類の存続を脅かす様々な危機が噴出している現代世界において、西洋中心主義的な諸概念のみならず、アジアに根差した不確実性に対応する知恵をアジアの経験から大系化、普遍化して世界に開くことは社会的要請となっています。東洋文化研究所は、最高水準のアジア研究環境を整備し、世界に開くことで、国際的ハブ拠点機能をさらに強化します。そして、SDGs達成に資する最先端のアジア研究を推進するとともに、国際的な視座を持ったアジア研究者を育成することで、アジア研究の新しい知的展開を促進させるため、このたび特定基金を設置しました。皆様の温かいご支援を賜りますようお願い申し上げます。

ご寄付の申し込み方法

- *本基金へのご寄付には、本基金と東京大学基金の両方の特典が適用されます。詳しくはホームページをご覧ください。
- *寄付特典の発送は日本国内に限らせていただきます。

<払込取扱票をご利用になる方法>添付の払込用紙をご利用ください。

<インターネットをご利用になる方法>
東京大学基金 WEB からお申し込みください。
<https://utf.u-tokyo.ac.jp/project/pjt180>

[寄付はこちらから→](#)



東京大学東洋文化研究所
所長

中島 隆博



【編集後記】 本号を編集しながら、教員公募面接での所長とのやりとりをふと思い出しました。「東文研の国際・社会的発信のために何ができますか」という問いに対して、「考えてみましたが、まだよくわからないのです。『通史』もその後の『東文研要覧』も読みましたが、2010年代半ばからは東文研の活動をうまくとどることができないのです」。思うところを率直に答えてしまい、「しまった！これは落ちて当然…」と肝を冷やしたのですが、審査の先生方も「そうですよね（笑）」と逆に同情していただき、ことなきをえて昨年10月から東文研の一員として働いております。早速所長の命を受けて、まずはできるところから、とりわけ News Letter の発行を通じて、もういちど紙媒体の発信手段を再開することからはじめました。本号が記念すべき第一号です。東文研の先生がたはみな縦横無尽に研究しており、その一部の活動しか紹介できませんが、たとえ微力であっても「アジア研究のアジア化」に貢献できればと思っています。（編集 上田遥 国際学術交流室 助教）

<https://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/>



東洋文化研究所 News Letter No.1 2024 年春号
東京大学 東洋文化研究所
〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1
Email: webadmin@ioc.u-tokyo.ac.jp